

講演.4 痤瘡に対する漢方薬の実践的投



武市 牧子 先生

つちばし診療所

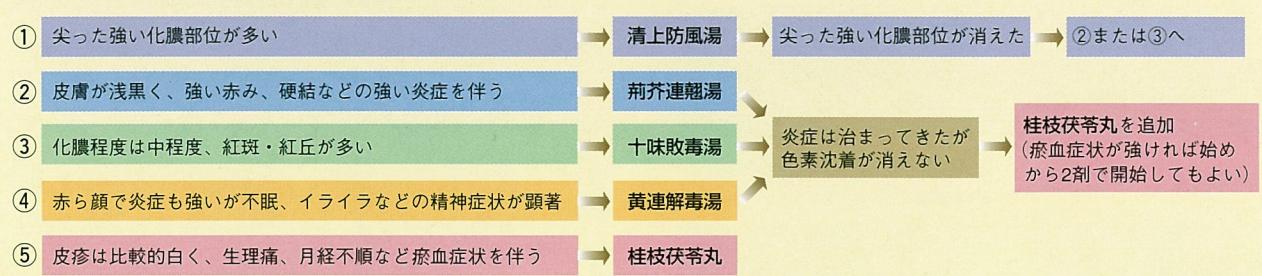
はじめに

痤瘡の治療にはさまざまな漢方薬が用いられているが、その一方で「証」がわかりにくく、処方の選択がしづらいという皮膚科医も少なくない。そこで今回は、病名に加え、「証」をマニュアル化しわかりやすくした実践的な処方例を示す。

対象と方法

痤瘡の治療に用いた漢方薬は、十味敗毒湯、荊芥連翹湯、黃連解毒湯、清上防風湯、桂枝茯苓丸の5方剤で、単剤投与69例、単剤では効果不十分で2剤併用した9例、治療開始時から2方剤を併用した8例の合計86例であった。効果判定基準としては、紅斑・紅丘・面疱・硬結・膿疱の5項目について改善の度合いをポイントで現わし、最終全般改善度を評

表 漢方薬の選択基準(証のマニュアル化)



価した。判定期間は、併用する抗生物質が減量されていることを確認の上、最大12ヵ月までとした。なお、抗生物質はクラリスロマイシンあるいはミノマイシンを化膿時に3～4日のみ投与した。

適切な漢方薬の選択が何より重要で、その選択基準を表に示す。

漢方治療による最終全般改善度

痤瘡に対する単剤治療の処方別最終全般改善度は、方剤間で大きな差を認めず、全処方合計で改善以上が80%（69例/86例）であった。また、症状別の最終全般改善度もとくに大きな差ではなく、5項目合計で改善以上が80%であった。このように痤瘡に対しては漢方薬単剤治療でも有効率が高かった。

しかし、単剤治療で化膿性炎症が消失し、色素沈着や紅斑だけが残存する場合は、それらの症状を瘀血と捉え、桂枝茯苓丸との2剤併用治療に切り替えた。切り替え前の最終全般改善度は改善以上で46.9%であったが、切り替え治療によって、全例が改善以上となった。なお、2剤併用の組み合わせは、桂枝茯苓丸と荊芥連翹湯がもっとも多かった。また、初診時から強い月経不順、冷え性、便秘などを認める場合には、治療当初から桂枝茯苓丸を含む2剤併用療法を基本とした。

症例

症例1 19歳、女性、十味敗毒湯処方例

小児喘息で幼小児期からステロイド剤の吸入や内服を繰り返していたが、初診時には、喘息発作はほとんどみられなくなっていた。月経不順あり。痤瘡

与法の検討

1987年 兵庫医科大学卒業、同大学第2外科入局
1994年 同大学大学院生化学教室修了
1995年 つちばし診療所副院長
2000年 同診療所院長

は、硬結、膿疱症状が非常に強く、いくつかの膿疱はトンネル状につながっていた。

治療として抗生素質の内服では著効は得られなかった。ステロイドアクネの可能性を患者に説明し、ステロイド剤を減量しながら、十味敗毒湯を処方したところ、約3ヵ月で炎症症状は消失し、6ヵ月後にはほとんど瘢痕を残すことなく治癒した(図1)。

症例2 17歳、男性、荊芥連翹湯処方例

顔から頸部までの痤瘡、毛囊炎がひどく、約5ヵ月、抗生素質の点滴と内服、さらには面疱圧子処置、外用塗布などを繰り返していた。少し改善傾向がみられたところで、荊芥連翹湯に切り替えた。すると約3ヵ月で炎症症状は消失した。

症例3 16歳、女性、清上防風湯処方例

初診時、面疱圧子処置を顔に繰り返し施しながら抗生素質を処方した。痤瘡と毛囊炎は背部にも見ら



図1 症例1の治療経過



図2 症例4の治療経過

れた。抗生素質では改善がみられなかっただため、清上防風湯に変更した。約1ヵ月で背部の痤瘡は消失し、3ヵ月後には顔にわずかに白色面疱を残すのみとなつた。

症例4 25歳、女性、荊芥連翹湯と桂枝茯苓丸の2剤併用への変更例

慣れない仕事から疲労が重なり、久々の休みがとれたといって来院。受診時、面疱、膿疱、硬結が目立ち、また、便秘がちで下腹痛があったため黄連解毒湯を処方した。4ヵ月後、紅丘、紅斑を残し軽快したが、赤みと色素沈着が目立つため、荊芥連翹湯と桂枝茯苓丸の2剤併用療法に切り替えたところ、約4ヵ月でほぼ治癒した。瘀血症状の把握が重要な症例であった(図2)。

まとめ

痤瘡治療に対して『証』をわかりやすくマニュアル化し、漢方薬を選択した。処方した漢方薬は十味敗毒湯、荊芥連翹湯、黄連解毒湯、清上防風湯、桂枝茯苓丸の5方剤であり、全処方合計の改善および著明改善は、単剤で80.0%であり、2剤併用では100%であった。漢方薬を用いた痤瘡治療は、耐性化の問題もなく、有効な治療法であると考えられた。

Comments

後山 全く異論を挟む余地のないほど、痤瘡に対する見事な漢方治療でした。峯先生、どういう印象でしょうか。

峯 非常にインパクトのある症例です。とくに荊芥連翹湯と桂枝茯苓丸の併用療法は見事で、この2つの処方の組み合わせは、非常にパワーのある組み合わせになることを実感しました。

後山 5種類の漢方薬についての使い分けの基準も大変有用なものと思いました。漢方治療をしていますと、皮膚科以外でもこのような皮膚疾患を診る機会がよくあります。そのような場合は、是非、本日の発表を参考にしていただきたいと思います。